

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】 神原ゆうこ

【所属】（助成決定時） 東京大学大学院 総合文化研究科 超域文化科学専攻（文化人類学）

【研究題目】

拡大 EU 下のスロヴァキア国境地域における社会の動態 - 「東欧」と「西欧」の境界線の多義性 -

【研究の目的】

2004 年の EU 拡大によって、かつて社会主義国であった「東」側のヨーロッパも政治経済的なヨーロッパ「地域」への統合を果たしたと見なされているが、実際のところ、加盟時に経済格差をはじめとした認識的な「西」と「東」の境界線が消滅したとは言い難かった。本研究では、このようなヨーロッパにおける「東」と「西」の境界とその統合に関する問題について、スロヴァキアを事例とした文化人類学的な考察を試みた。

中欧の旧社会主義諸国は、1989 年以降のおよそ 20 年間で、体制転換とグローバリゼーションと地域統合を同時に経験してきており、かつての「東西」の境界線もこの変化の波の中で、ある程度は消失している。それは、この「東西」の境界線を自由に移動する人々の存在から指摘可能である。しかし、その一方で地域社会が社会主義時代のシステムから、いまだ転換し難い状況が続いていることも先行研究によって指摘されている。本研究は、EU 統合の影響により、地域社会がより密接にマクロな社会状況と連動する傾向が強くなってきている状況下で、新たな生活の方法を見出す人々の実践を考察することを目的とした。

【研究の内容・方法】

本研究では、以上に述べた研究目的に沿って、かつての「東」と「西」の境界であったスロヴァキアの西部国境（オーストリアとの国境）沿いの 2 つの村落においてフィールドワークと、体制転換以降の社会変容に関する文献調査を行った。フィールドワークを行った村落は、社会主義時代以前、社会主義時代、体制転換以降と時代によって、国境のありかたが変化したことによって生活が大きく変化しているが、都市部と比較すると体制転換以降の経済発展には取り残された地域でもあるという特徴を持ち、「東西」の境界線のありかたについて考察するにあたって非常に興味深い地域であった。

具体的に 1989 年の体制転換から EU 統合を経たスロヴァキアの地域社会の生活の変容を捉えるにあたっては、以下の 3 つの項目に着目して研究を進めてきた。①「東」と「西」の境界が作りだす労働市場について：国境地域は経済的に裕福な「西」側への物理的な距離も近く、越境通勤や短期間の雇用機会に恵まれてきた。その一方でスロヴァキアの EU 加盟に伴う労働市場の自由化の過程において、EU 新規加盟の中東欧諸国からのイギリスへの労働移動のトレンドの影響を国境地域も受けており、単純に国境地域という限られた空間における「東」から「西」への労働移動とは別の側面も観察されている。②トランスナショナルな空間における移動と定住について：現在の国境地域におけるトランスナショナルな空間は、労働者の移動によって形成されるだけでない。体制転換以降の数々の交流プロジェクトを通して定住する人々も互いに国境の向こう側と接触する機会が増加し、社会主義時代以前とは異なる形の新たなトランスナショナルな空間の形成が観察された。③スロヴァキア国内からの「統合」への圧力：国境地域における生活のなかでの越境という行動による変容だけでなく、体制転換以降、EU 統合に向けた社会制度の変化、さらにはそれを通じた「民主主義」や「資本主義」などの新たな「西」側の思想の受け入れが、この地域が「統合」されていくと人々が実感する契機となった。

【結論・考察】

EU 統合は、体制転換後の「東欧」と「西欧」の境界の消滅の結果ではなく、統合過程や統合後の社会の変化によって、この境界が持っていた認識的な意味の変容が加速してきたというのが現状であるといえよう。多国籍企業が進出し、エリート層も多く集まる都市部にとって、EU 加盟は名実ともに「ヨーロッパへの回帰」であったかもしれないが、たとえオーストリアという「西」側の一部と接している国境地域であっても、村落部においてそれは「西」側の世界に合わせただけであり、「統合」とは異なるものであった。しかし、統合過程の制度的な変容を経て、体制転換以降の「新たな世界」における生活の方法、すなわち新たな思考を取り入れることは、都市だけでなく村落においても少しずつ広がり始めた。「東欧」と「西欧」の境界線は、かつての政治体制の違い、経済格差、労働移動の障壁など様々な意味をもつ境界線とし用いられてきたが、このような「適合」から「統合」への変化が、この地域における境界線の持つ最後の意味となるのではないかと考えられる。